独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院

Osaka Rosai Chronicle

大阪ろうさいクロニクル

第６号

発行日
2023.10.1

今や手術支援ロボット『ダビンチ』が中心の泌尿器科手術

副院長／泌尿器科部長　　辻　畑　正　雄

平素より、大阪ろうさい病院が大変お世話になり感謝申し上げます。

さて、外科的手術は手術支援ロボット『ダビンチ』の出現により、大きく変貌を遂げたといっても過言ではありません。ダビンチ手術は、高画質で立体的な３Dハイビジョンシステムの手術画像の下、人間の手の動きを正確に再現する装置で、術者は鮮明な画像を見ながら、人の手首よりはるかに大きく曲がって回転する手首を備えた器具を使用し、精緻な手術を行うことができます。そのため、患者さまには、出血が少ない、機能が温存できる、回復が早いといった低侵襲な手術治療が提供できます。

また、術者への身体的・精神的負担も軽減できるため、外科医の手術可能年齢が延長すると考えられています。

大阪ろうさい病院では、2016年６月にダビンチサージカルシステムSiが導入されました。泌尿器科では2016年６月～2023年６月までの７年間で814症例のダビンチ手術を行いました。それまで開腹や腹腔鏡下で行っていた前立腺癌や膀胱癌、腎癌そして腎盂形成の手術は、ほとんどすべてダビンチ手術で行うようになりました。2023年９月には当院に新しいバージョンのダビンチサージカルシステムXiが導入されました。これにより、さらに手術がやりやすくなることから、これまで主に腹腔鏡で行っていた腎盂・尿管癌や副腎腫瘍の手術もダビンチで行う予定にしています。泌尿器科手術は、今や膀胱癌に対するTUR-BT、前立腺肥大症へのTUR-P／HoLEP、結石の手術であるTUL／PNLなどの内視鏡下手術を押しのけてダビンチ手術が中心になっていると思います。今後さらに、high stageな癌に対する手術や結石治療に対してもダビンチによる手術が行われるようになると考えられます。そのため、我々泌尿器科医は、より安全でより質の高い治療を提供できるように精進していく必要があると考えます。

最後に、地域の皆様に、より信頼される病院を目指してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

ロボット（ダビンチ）手術の風景

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1．地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2．高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3．患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4．勤労者医療を担ってこれを推進します
5．働きがいのある職場づくりを推進します

「消化器外科疾患に対するロボット支援手術」

外科・消化器外科 下部消化管外科部長　鄭（てい）　充（みつ）　善（よし）

仲秋の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

外科・消化器外科は、スタッフ・専攻医合わせて計12名が常勤医として勤務し、堺市圏域の地域がん診療連携拠点病院のひとつとして、日々の診療・手術を担当しております。年間手術数概算値は、全身麻酔手術症例：1100件（うち400件は悪性腫瘍手術）で、南大阪エリアでも有数の手術数です。これもひとえに地域の先生方からのご紹介の賜物と考えております。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

さて近年、急激に普及しつつあるロボット支援手術ですが、その特徴は、より高精度で緻密な手術が可能となったことです。実際の手の動きが鉗子に反映される直感的な操作、多関節を持つ鉗子により人間の手以上の自由な動きの実現、実際の手の動きを最大５倍の繊細な動作、高解像度・３D画像による立体的な解剖理解により、根治性と機能温存の両立をより高い精度で目指すことが期待できます。

消化器がん領域では、2018年４月に食道がん・胃がん・直腸がんで保険適応となり、2020年には膵がん、2022年には肝がん・結腸がんに適応拡大されました。当科では2019年１月に直腸がんに対してロボット支援下手術を導入し、2022年６月に結腸がんに導入しました。現在、日本内視鏡外科学会ロボット支援手術認定プロクター１名、da Vinciサージカルシステム認定医６名で手術を担当しています。大腸がんにはロボット支援下手術を第一選択とし、今後、胃がんにも導入予定です。

ロボット支援手術はAI・高速通信技術などの次世代テクノロジーと相まって、今後急速に進歩していきます。当科では、常に最先端の技術を取り入れ、患者さまにとって常に最善の治療を提供できるよう努力してまいります。引き続き大阪ろうさい病院外科・消化器外科を宜しくお願い致します。

ロボット（ダビンチ）手術の風景

診療科紹介　精　神　科

精神科部長　行田（なめた）　建（けん）

当院精神科は、昭和37年の開院当初より開設され、病床もありましたが、他の総合病院精神科同様、医療経済的理由などにより病床がなくなり、外来診療のみを行っております。

一日の平均外来患者数は、30名前後、そのうち４、５名は院内紹介患者となっています。

その内訳は、ほとんどが感情障害（うつ病、双極性障害）及び神経症（パニック障害、恐怖症、身体表現性障害など）です。院内紹介は、器質性精神障害（せん妄）と認知症に伴う行動・心理症状への対応です。

スタッフは、常勤医師１名、非常勤医師１名、非常勤公認心理士１名、非常勤看護師１名、医師事務１名の体制で診療にあたっております。

また、地域がん診療連携拠点病院のため、緩和ケアチームのメンバーとしてがん患者さまのメンタルケアも行っております。また、公認心理士による有料のカウンセリングも行っております。

入院中の患者さまの超高齢化に伴い、上記症状への対応が非常に増えておりますが、十分に対応できていないのが実情です。スタッフが充実すれば、精神科リエゾンチームを立ち上げ、これまで以上に院内からの要望にこたえられると思っております。

また、院外からのご紹介の初診の患者さまにつきましては、かかりつけ医さまからのご紹介状をいただき、当科で対応可能な症例（主に入院対応や救急対応が必要でない方）のみ診察を受けております。そのほか、思春期症例や認知症、てんかん、アルコール依存症などは地域の専門医療機関への受診をお願いしております。地域連携の点からは非常にご不便とご迷惑をおかけしておりますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

カウンセリング室

心理テスト室

診療科紹介　腫 瘍 内 科

「新病院における腫瘍内科診療について」

腫瘍内科部長　奥　野　達　哉

皆さんこんにちは。大阪ろうさい病院に腫瘍内科が開設され、近畿大学腫瘍内科から着任させて頂いてから４年が経過しました。今回は機会を頂戴しましたので、新病院における診療についてお話させて頂きたいと思います。

当科は、堺市圏域における国指定地域がん診療連携拠点病院である当院で、①消化器・乳腺（月曜日）診療を中心に、臓器横断的な外来がん化学療法・副作用に対応する事、②次世代のがん診療・化学療法も大阪ろうさい病院内で対応可能とする事、③院内のがん薬物療法をチーム医療でサーベイランスし、より安全ながん診療を患者さまに提供する事、を診療目標として掲げております。

直近2022年の診療実績については、下記のとおり、大阪ろうさい病院各科から消化器腫瘍・乳腺腫瘍を中心に、多くの進行癌患者さまの外来化学療法だけでなく、がん遺伝子パネル検査のご紹介・ご説明への対応も引き受けております。

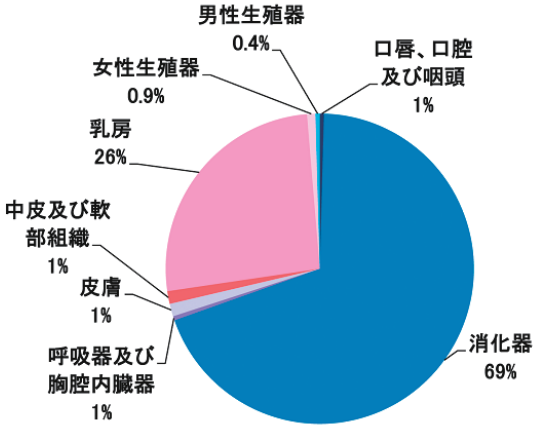
2023年１月新病院に移行してからの診療の変更点ですが、新病院では、２F消化器外科、内科に隣接した診察ブースを設けて頂いた為、外来化学療法患者さまの紹介や診察が、より円滑に行う事が出来る様になりました。また、個人的には、がん薬物療法専門医指導医及び日本臨床腫瘍学会認定研修施設（連携施設）の資格申請・取得を行わせて頂きました。これにより、大阪ろうさい病院他診療科の先生方でも、将来的ながん薬物療法医の資格申請の際、当院での臨床実績を活用できる様になりました。

最近開設した腫瘍内科の診療実績は未だ大きいとは言えませんが、今後も進化するがん治療に、大阪ろうさい病院内で幅広く対応できる体制作りに微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご指導・ご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

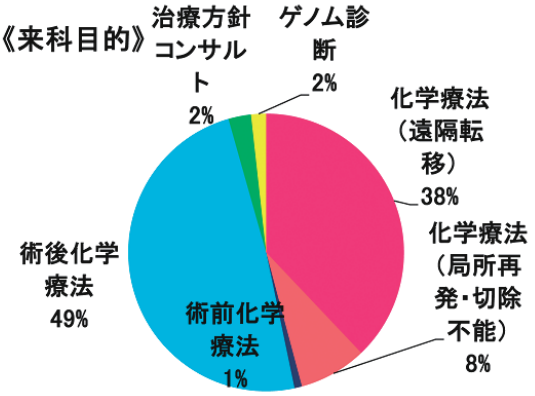
1《受診患者癌部位・癌腫》　2022年度

部位	患者数
口唇、口腔及び咽頭	1
消化器	157
呼吸器及び胸腔内臓器	1
皮膚	3
中皮及び軟部組織	3
乳房	59
女性生殖器	2
男性生殖器	1

2《受診患者 原発部位内訳》



3《来科目的》



診療科紹介　病理診断科

病理診断科部長　後藤孝吉（ごとうたかよし）

当院の病理診断科は、現在、常勤医師２名および非常勤医師３名（全員が日本病理学会認定病理専門医）にて業務に当たっております。検体数は組織診、細胞診ともに年間１万件程度と大阪府下でも非常に多い部類に属しますが、８名の臨床検査技師、１名の事務員とも協力しながら、迅速かつ正確な病理診断を日々心がけております。検体採取から診断報告までの平均所要日数は生検検体が２～３日であり、手術検体においても多くは７日程度までに報告しております。

病理診断は常に正確な診断が要求されますが、時として診断困難例も存在します。診断困難例に対しては複数の病理医による検討を実施し、それでも解決しない場合には該当領域の専門病理医にコンサルテーションを実施することで、正確な病理診断につなげております。また、生検検体を中心にダブルチェックをすることでミスの防止を図っております。さらに、臨床各科のカンファレンスに出席して情報交換し、臨床的な要求事項を認識した上での診断を心がけております。

近年では、特にがん診療の領域において遺伝子関連検査が日常的に実施されるようになりました。その多くは腫瘍部分の病理組織検体にて実施されるため、中央検査部と適宜連携して検体の処理や保管を適切に実施し、精度の高い遺伝子検査を実施できるように努めております。また、薬物治療の進歩に伴い、種々の薬剤適応と紐づいた病理学的検査（特に免疫組織化学）が増加しておりますが、適切な精度管理のもとで可能な範囲で院内実施することで、報告期間の短縮に努めております。

患者さまと直接接する機会はほとんどありませんが、質の高い病理診断を通して地域医療に陰ながら貢献していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

切り出し風景

検　鏡　室

診療科紹介　放射線診断科

放射線診断科副部長　上　田　　賢

放射線診断科の診療内容は、大きく２つに分かれます。１つは画像診断で、CTやMRI、核医学検査などの種々の画像診断の読影結果をレポートにして、有用な医療情報として依頼医のもとに送り届けています。新病院移転の際にCTは新機種を２台、MRIは3.0T（テスラ）の新機種を１台それぞれ導入し、以前より鮮明で有用な画像を描出することができるようになりました。

読影件数についても、昨年度は合計40,000件以上のレポートを作成しており、年々、増加傾向となっています。

また、病診連携を介して近隣の開業医の先生方からのご依頼も数多くいただき、地域医療への貢献にも努めております。

もう１つはIVR（Interventional Radiology：放射線画像診断技術を用いた画像下治療）で、細い針やカテーテルを用いて行う近年急速に発達した低侵襲治療です。悪性腫瘍を栄養する動脈から抗腫瘍薬を注入し、流れを止める動脈注入化学療法や動脈性出血（消化管出血、喀血、外傷、術後出血など）に対する止血術、動脈瘤・静脈瘤・血管奇形に対する治療、生検術、膿瘍ドレナージ、リンパ管造影など様々な分野で治療を行っています。こちらについても、昨年度の施行件数は合計200件以上と前年度と比較して増加し、アクティビティの上昇を感じています。

また、毎週いくつかの診療科とカンファレンスを実施することによって連携を深めることや読影レポートおよびIVR適応に関するコンサルトにも気軽かつ適切に対応することも心掛けております。現在スタッフは常勤医師３名と専攻医１名、その他数人の非常勤医師で運用しており、難解な症例に対しては科内でのディスカッションも盛んに行っています。

これからも引き続き他診療科と協力しながら、的確な読影レポートを送り届け、適切なIVR治療を行うことで個々の患者さまにとって良質な医療を提供することを継続していきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

放射線診断科　集合写真

部門紹介　臨床工学室

臨床工学室主任　平　井　康　裕

臨床工学技士という医療職種をご存じでしょうか。あまり私たちのことを知らないという方も多くおられるかもしれません。臨床工学技士は1988年に誕生した比較的新しい医療機器の専門医療職で、臨床検査技師や診療放射線技師、理学療法士などと同じ診療補助に従事する医療技術者です。医療機器、特に生命維持に関わる医療機器の操作および保守管理を行っています。これを機会に私たちのことを知っていただければと思います。

当院では、現在12名の臨床工学技士が在籍しており、体内に貯まった老廃物などを排泄、あるいは代謝する機能が働かなくなったときに行う人工透析などの血液浄化業務、心臓手術の際、心臓と肺の働きをする体外循環装置（人工心肺装置）の操作および管理を行う人工心肺業務、心臓カテーテル検査やカテーテル治療時のサポート、不整脈治療に使用する機器の操作、心臓ペースメーカー植え込み時の介助および遠隔モニタリングや外来での管理、緊急時に使用する補助循環装置の操作を行う心臓カテーテル室業務、弁膜症治療であるTAVI, MitraClip手術のサポート、ロボット支援下手術（ダビンチ）時の機器のセッティングや管理などを行う手術室業務を担当しています。院内にはMEセンターがあり、３名の外注職員にてシリンジポンプや輸液ポンプといった医療機器の管理と保守点検を行っています。その他、呼吸が十分に行えなくなったときに装着する人工呼吸器を使用している時は、安全に装置が使用されているかなどの確認業務も行っています。

また、私たちは学会参加や学会が認定する認定制度を積極的に活用し、自分たちのスキル向上に努めています。現在、学会認定を取得した技士が多数在籍しています。

最後に、高度な医療技術の進歩に伴い、医療機器の高度化・複雑化が進む中、私たち臨床工学室はチーム医療の一員として皆さまに安心・安全を提供できるよう頑張っていきたいと考えています。

臨床工学室　集合写真

部門紹介　治療就労両立支援センター

治療就労両立支援センター所長　久保田（くぼた）　昌（まさ）　詞（し）

「治療と仕事の両立」とは、病気を抱えながらも働く意欲があり、全く元のとおりにはいかずとも職場でこなすべき仕事に耐えうる能力のある労働者が、仕事を理由に治療機会を逃すことなく、また、治療を理由に職業生活の継続を妨げられることなく、適切な治療を受けながら、生き生きと就労を続けられることです。少子高齢化で働き手の減少が加速する中、国の働き方改革の一環として「病気の治療と仕事の両立」が掲げられています。

当センターは2014年に「勤労者予防医療センター」から「治療就労両立支援センター」に改称し、それまでの一次予防中心の活動を三次予防中心に転換して国の政策医療を推し進めるために日々活動しています。当初より数年間は入院・通院患者さまへの直接的支援を行なってまいりましたが、現在は、病院内の様々な現場で両立支援ニーズが発生した際に、まずは看護部で勤労者看護として対応していただき、必要に応じて間接的・直接的に支援しています。これまでは、主にがんや心臓病患者さまへの支援が中心でしたが、基本的には全ての疾患について支援をしていく方針です。

労働者健康安全機構は国の委託を受け、患者さま～企業～医療機関の間の調整を行うハブとして「両立支援コーディネーター」の養成を行なっています。すでに全国でコーディネーター有資格者は１万７千人余りにのぼり、堺市及び周辺の医療機関におかれましても、すでに資格をお持ちの方がおられることと思います。私どもは地域のコーディネーターの方々ともネットワークを作り、必要なら情報・ノウハウを共有しながら、復職や就労継続に困難を感じている患者さまへの支援を一層拡大していきたいと考えています。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

治療就労両立支援センター　集合写真

独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曽根町１１７９－３
TEL　072－252－3561（代表）
　　072－255－8076（メディカルサポートセンター）
FAX 072－255－8203（メディカルサポートセンター）
http://www.osakah.johas.go.jp/
（病院HP）